

筑波研修旅行の思い出

超歴史研究会 鈴木美佐子

筑波というとき皆さんは何を思い出されるでしょうか？

「筑波嶺の 嶺より落ちる男女の川恋ぞ積もりて 淵となりぬる」とあるように万葉の世に歌垣が行われたという謂われからのおおらかな恋の舞台の筑波でしょうか？

サアーサアーお立ち会い。ご用とお急ぎでない方はゆつくりと聞いておいで。遠出山越え笠のうち、聞かざる時は物の白黒出方善悪がとんと分らない、山寺の鐘がゴーンゴーンと鳴ると言いども、童子来つて鐘にしゅもくを当てざればとんとカネの音色がわからない。

サテお立ち会い。手前ここに取りいだしたるは筑波山名物ガマの油、ガマと申してもただのガマとガマが違ふ。これより北、北は筑波山の麓は、おんばこと云う露草をくろうて育つた四六のガマ、四六五六はどこで見分ける。

前足の指が四本、後足の指が六本合わせて四六のガマ、山中深く分け入って捕いましたるこのガマを四面鏡張りの箱に入れる時は、ガマはお

のが姿の鏡に映るを見て驚き、タラーリタラーリと油汗を流す、これをすきとり柳の小枝にて三七・二十一日間、トローリトローリと煮つめましたるが、このガマの油。

この油の効能は、ひびにあかぎれ、しもやけの妙薬、まだある、大の男の七転八倒する虫歯の痛みもぴたりと止まる、まだある出痔いぼ痔、はしり痔、はれもの一切、そればかりか刃物の切れ味を止める。

取り出したるは夏なお寒き氷のやいば、一枚の紙が二枚、二枚の紙が四枚、四枚の紙が八枚、八枚の紙が十六枚、十六枚が三十と二枚、三十二枚が六十四枚、六十四枚が一束と二十八枚、ほれこの通り、ふつとちらせば比良の暮雪は雪降りのすがた。これなる名刀も一たびこのガマの油をつける時はたちまち切れ味が止まる、押ししても引いても切れはせぬ、と云うても鈍らになったのではない、この様にきれいに拭き取るときは元の切れ味となる。

さアーお立ち会い。この様にガマの油の効能が分つたら遠慮は無用だ、どしどし買つて行きやがれ！

との口上で、名高いガマの油売りの話でしょうか？ 前置きが長くなりましたが、今回の筑波山探訪では、どんな筑波の顔に出会えるのでしょうか？

四月一日(土) 午前十二時。つくばエクスプレス「つくば駅」に集まった四十六名の参加者とともに出発です。今回も鹿島神宮をお訪ねした折にご案内くださった元筑波山神社宮司の矢作幸雄先生にご案内いただくことになっています。

最初に訪れたところは、大形小学校の一角にある鹿島神社とヤマトタケルの尊(みこと)の伝承地の岩崎山です。伝承とは尊が、むかしは湖だった上大形地先を舟で通過しようとした時のこと。部下として従った将兵らの喉が渇き苦しんでいたため、青々と茂った小さな島に舟を着けて上陸し、飲み水となる泉を探しました。しかし、島は全体が岩だらけで、一滴の水もありませんでした。

ところが、尊が腰に付けていた剣を抜いて岩の一角をさつと切り裂い

たところ、切れ目から清らかな泉が
こんこんと沸き出てきました。将兵
たちは大喜びで手に水をすくい、渴
きをいやすことが出来ました。人々
は、そこを、命が剣で切り裂いたこ
とにちなんで、岩裂山（岩崎山）と
言われるようになったとか・・・こ
こには、いまでこそ枯れてしまいま
したが、清らかな水が湧き出す全
国でも珍しい突き抜き井戸があっ
たそうです。

岩崎山は、見事に岩の寄せ集ま
った小山に見えます。昔はここが小島
であったとので、直ぐ下の鹿島
神社も海の中だったのでしょうか。
鹿島神社の入り口にもイワクラと
しき岩がいくつもあり、杯状穴が
ある敷石も見られました。昔、波に
洗われた時に出来た物なのでしょう
か？ それとも人為的な物なわけ
でしょうか？ ヤマトタケルノミコト
はこの岩を見たのでしょうか？

さて、次にはいよいよ、歌垣が行
われたといわれる夫女ヶ原（ぶじょ
がはら）へと向かいます。夫女ヶ原

には二つに割れた夫女ヶ石があり、
夫婦岩と言われていますが、鈴木旭
副会長より「目玉のペトログリフが
筑波山を向いている」とご説明を受
けました。もちろん、目玉は大事な
ものへ向けられているわけですから、
ここは何かの祭の祭場であり、筑波
山がご神体であったのでしょうか。
また、ここに来る道々でも果樹園
や畑の中などに岩がゴロゴロと集め
られているのを目にしましたが、
まさにこのあたりは岩の宝庫であ
ったのでしよう。

そもそも筑波山は山頂を含めて筑
波山の山体の大部分は硬い「斑れい
岩」と呼ばれる深成岩（地下深くで
マグマが冷え固まってできた岩石）
によって作られているそうです。斑
れい岩とは遠い昔に火山になりそこ
ねて（地上に噴火しなかった）地下
で固まったマグマだまりの化石だそ
うです。

マグマだまりの比重が軽かった部
分が固まったのが女体山付近の白い
岩で比重が重い岩は麓に多く分布し
ているそうです。そして、斑れい岩

を放射状に取り囲んで花崗岩が分布
しているそうです。花崗岩は斑れい
岩に比べるとろく浸食されやすい
ため、斑れい岩が山頂部を、周囲の
花崗岩はそれより低い山体を作っ
ているそうです。

筑波山の中腹以下では、これらの
古い岩盤から剥がれ落ちた岩のかけ
らが積み重なってできた崖錐堆積物
が岩盤を毛布のように覆っているそ
うです。登山道のいたるところで見
かけるごろごろした岩とその間を埋
める小石や土からなる地層がそれ
です。筑波山の麓に広がる美しい裾野
は、崖錐堆積物が岩盤の起伏を埋め
るように堆積してできたものだそ
うです（小松原塚・内田洋平の筑波山
HPより）。

ちよつと、難しいけれども、斑れ
い岩よりもろく侵食されやすいと
いわれる花崗岩がたくさん麓にあ
るのも筑波の成り立ちを考えれば領
けることでした。そして、中腹の巨石
も多くは花崗岩と思われまます。筑波
石として名石とされ、昔から庭石と
して重用されていたのも同様に領け
ます。

次に、筑波山神社で毎年行われる
神事「御座替神事」を見学しました。
見学終了後は拝殿に上がらせていた
だいて参拝し、御祓いを受け、御座
替祭りの由緒をお聞きしました、一
般の人は入れない禁則地にある「日
枝の宮」と「春日の宮」を特別に拝
見する事を許されました（筑波神社
の、元宮とも言われる「六所神社」
にも以前は、同じような美しい赤い
社殿が鎮座していたそうです）。

一日目はこうして、早めに宿に戻
ることになりました。宿では、世話
役をお引き受けくださった畔蒜・仲
田ご夫妻らが、なにくれとなく気を
使って下さっています。大人数の引
率はさぞ、大変だったことでしょう。
ここに改めて御礼申し上げます。お
かげさまで、楽しい夕餉となり、石
好きの皆様とも親交を深めることが
できました。

また、急遽用意していただいたプ
ロジェクターで、カメラマン須田郡
司さんや山形にお住まいの会員岡崎
さんの貴重な巨石群の写真を堪能で
きましたことは、大変幸運にも楽し

いひと時になりました。プログラムとしては予定されていませんでしたが、ラッキーな巡り合いとなりました。ありがとうございます。そして、一同心地よい眠りについたのでした。

二日目も手配いただいたおにぎりの弁当を受け取り、一同期待を胸にマイクロバスに乗り込みます。

まずは車で筑波山のケーブルカー乗り場まで向かい、山頂を目指します。男体山山頂の男体山神社本殿はもちろん岩の上に鎮座されていて、横にはヤマトタケルノミコトの「国見岩」がありました。ここで、一生懸命に頑張つて登つたことを記念して全員で記念写真。本当に、皆様、この筑波の岩を一つでも多く目にされたいと頑張つておられるのが伝わってきます。

そして、女体山神社。ここは筑波山最高峰になります。イワクラの上に鎮座します。神社に参拝すると神社の裏手には下から雲が湧きくる、最高のイワクラポイントになります。岩から見えるのは天と下から湧きあ

がる雲。本当に別世界のようでした。イワクラ写真家の郡司さんの石笛もすべてが風景にマッチした空間になりました。もちろん、ここでも皆、思い思いの記念撮影に余念がありません。ここからはイワクラ街道を下山するわけですが、大丈夫でしょうか：

下り始めると直ぐにガマ蛙に似たガマ石があります。口のあけている方向が夏至の日の出、冬至の日の入りの方向を指しているとか。ユーモラスな感じですね。そしてセキレイ石。岩の間を降りていくと、次には大きな大仏岩があります。なるほど、大仏に見えます。そして、屏風岩、ここから見上げた大仏岩の反対側の山肌の岩の風景もいいものでした。

そして北斗岩、裏面大黒岩、出船入船岩、母の胎内潜り、高天原、弁慶の七戻り岩と続きます。ところどころに鎖が用意されていたり、結構急斜面の道に次々に現れるイワクラに、一同子供に返ってしまったようです。高天原のイワクラを登ると、そこにも神社が祭られています。そ

こから見上げたイワクラのすばらしいこと！ 思わず見とれてしまいました。

弁慶の七戻り岩を抜けると、弁慶茶屋です。ここで、問題が発生していることに気がつきました。私たちは先達役をお勤めいただいている矢作先生たちを見失わないようにしながら、写真を撮りながら降りて行つたのですが、後に続く人たちの姿がやがて見えなくなり、声もあまり聞こえなくなっていました。あまり、遅れてもと思い、先を急いだのですが、先生の先方はすでに三十分も待つておられたとのこと・・・予定のコースも盛りだくさんゆえ、全部回れるか、案内役の矢作先生も心配されておりました。

矢作先生らは、私たちの顔を見て直ぐに先を行かれることになったのですが、ここでハプニング発生！ すぐ後から来た後発隊から集合場所が「筑波山神社」から「つつじヶ丘ケーブルカー駅」へと変更になったとのこと。既に先発隊は、間違つたコースで下山された後でした・・・

結果的には、そんなにロスする事もなく無事に合流できたわけですが、確かに携帯もつながらない山中で、ましてや岩を見ると子供に戻つてしまふ人々を引率するには、小学生に對するような配慮が必要なのかもしれません。

初めてお会いする方々がほとんどの中で、員数を確認するのに、グループ分けしたり、各グループでの時間配分や目印のリボン、帽子や旗の利用も考えていいのかも知れないと思わせられた出来事でした。何しても、迷子や怪我もなく、全員が無事下山できたことは幸いでした。世話役の方々のご心労は如何ばかりであったことでしょうか。一同になりかわつて、お詫びとお礼を申し上げます。

そして、次の訪問先「月水石神社」へと向かいました。民家の間に奥まつてある静かなこの神社は『当祭神ハ筑波山両神イザナキ、イザナミ尊第四御子磐長媛ヲ祠ル。病ニテ登ル事能ズ、比ノ地ニ於テ崩ズ。両神ノ下命ニテ下々ノ守護神トナル。社主』

と、あるように記紀の記述とは違つた伝承があります。

磐長媛という珍しいご祭神で、この地で没したとの伝承には惹かれるものがあります。また、ここには遊郭の遊女達が望まない妊娠をせぬように祈り通つていたという悲しい伝承もあります。小さいながらも由緒を感じるような社の裏手には、月に一度赤い水が流れると伝わる磐座が祭られていました。確かに磐座の窪みには赤い水が流れた跡が見られました。きつと、岩の中の鉄分が酸化し雨などの折に赤く色づきながら流れるのでしょうか。

女神であることも、子宝の神であることも納得させられます。静かな森の雰囲気のこの神社の磐座も、身近な磐座として土地の人々にしまれたのでしょうか。薄暗くも静かな雰囲気の女神の神社にはなぜか、多くの女性の涙をも受け止めてきた神社のような感じが漂っているような気がしました。

次に近くの飯名神社へ向かいます。こここの主祭神は宇気母知神ですが、

その創建に関しては記録が残つておらず良く分かつていないそうです。

地元では、昔から筑波山をご神体山として崇められていたようですが、ここを里宮としてお祀りされたのでしょうか。地元では、「飯名弁天」の名で崇高されていて、だるま市などで賑わうようです。社殿の裏手には、大きなイワクラがあり、ご神体石となつてはいるのですが、そのイワクラの上にはメンヒル状の小振りの立石「男石」が立っています。また、境内には特徴的な巨石が多く点在しています。実はここを紹介している多くのホームページで、社殿裏手のご神体磐を「女石」として記述しているのですが、実は正面鳥居入り口から参道階段の左手にあるものが「女石」だそうです。裏手に回ると確かに大きな亀裂が走っていました。旭さん曰くここにも目玉のペトログリフが見られ、女体山↓月水石↓女石は直線で結ぶ事が出来るそうです。

時間が押しているので先を急ぎますが、次は六所神社です。ここは延暦二十年（八〇二）、坂上田村麻呂が

蝦夷征討の凱旋の折、神鏡、宝剣等を奉納したと伝えられていて、明治三年、台風で鳥居が倒れた時、本当に「石鳥居征夷大將軍坂上田村麻呂 建立之」の銘のある銅鏡が発見されたとの由緒ある神社で、筑波山の里宮とされています。しかし今は跡地があるだけで、とある宗教団体の管理地となつてはいるそうです。ここは、筑波山神社の権禰宜さんのお話にあつたように、昔は御座替祭はこと筑波山の山頂の奥宮で行われたといい、筑波神社の日枝神社、春日神社と同じような社が建つていたとか。

そして六所神社は筑波山の里宮ですが、この神社の裏手にある、宮山とお宝山がまたすごいところなのでした。二つの山は古墳かと思うような、お椀型の小さな里山です。ところが、ここにも未発見の磐座があるとの地元情報もたらされたことから、今回の研修地に組み入れられたものです。

時間が押していたので、一時は中止にしようかとの話も出た中で、世話役の方が、帰りの時間の確認など

いろいろ手配して下さり、せっかくだから、一つでも多くの磐座が、一人でも多くの方に見られるようにとのご配慮から、なんと、無理かと思われた二つの山の磐座を見ることができました。

お宝山の磐座は、地元の木村さんが藪を切り開いて、道を付けて下さいました。感謝です。小さな山の中にピラミッド型の大きな岩がありましたが、灌木が茂つていてなかなか全体像が把握できませんでした。岩の上方に白い石英の線が回つています。南側に磐座が集中しているようです。また、隣の宮山には頂上付近の道からすぐに磐座へいけるとのことで、山を登ることなく磐座を見ることができました。

宮山の磐座の南麓には六所神社が鎮座するとのことで、六所神社からが正式な磐座への道だったように思えます。六所から登ってきて見る磐座は、さぞ石組みも美しく見える事でしょう。そして、磐座の先には筑波山があります。何でも、お宝山と

宮山は小さな谷を挟んでおり、この巨石群は谷を挟んで向かい合つてい

るとか・・・

その昔、二上山は祖霊の山とされて低い峰から高い峰の祖霊を祭ったとか聞いたことがあります、そんな関係がこの、宮山とお宝山にもあったのでしょうか？ また縄文時代、この辺りは海だったところもあると聞きます。はたして、宮山とお宝山はいつごろ作られたのでしょうか？そして、岩はどこからか持って来られたものなのでしょうか。それとも、偶然にこの地にあつたものなのでしょうか？

そんなことを調べたら、磐座の起源が見えてこないだろうか？ と筑波山をバスの窓から仰ぎながら考えながら、帰路に着いたのでした。それにしても、イワクラ（磐座）学会の研修旅行だからこそ出会える磐座に今回も出会えた事を感謝しつつ、今回のつたない報告と致します。

地元の皆さま、世話役の皆様ありがとうございました。

了